



彼自身、直接的な表現で国民主義的ロマンティシズムを否定し、あるいは徒に革新的な創作態度に対する疑問を投げかけてきているが、「無秩序のなかの秩序」というニールセンの言葉こそが、ニールセンの立場を、とりわけ明確に示すものと言える。他者の模倣といった創作態度を否定することはもちろんのこと、固定観念や、先入観による拘束を解き放ち、あくまで固有の哲学に根ざし、計算し尽くされた彼の音楽がもつ奥行の深さが、本論文により浮き彫りにされたと確信している。

論文は二部構成で、第一部ではニールセンの生涯、及びニールセンの音楽的特質についての論述を行い、第二部ではニールセンのヴァイオリンに関わる作品の分析を行った。

第一部では、まず第1章として、ニールセンの生涯について、その背景となる世紀末デンマークの社会と芸術文化の状況を概説し、ニールセンの略歴と作曲活動の変遷を追った。続く第2章では、ニールセンの音楽的特質といえるヴァイオリンとの関わりについて述べ、更に室内楽作曲家としての彼の位置付けへと論述を展開した。

第二部では、ニールセンのヴァイオリンに関わる作品の分析を行った。そこでは、各作品をモティヴィッシュ・アルバイト（動機操作）の観点から論述した。

今回の分析が、ニールセンのヴァイオリン作品に限定して行われたことは、彼独自の位置付けを明確に導き出すためのアプローチとして有意義なものとなった。ニールセンの作曲分野は交響曲から歌曲に至るまで多岐に及んだが、ニールセン自身がヴァイオリニストであったこともあり、ヴァイオリン作品には、彼の特質がはっきりと読み取ることができるのである。

更に、私自身がヴァイオリニストであり、本論文の執筆と平行して彼の作品の演奏を試みることを主眼としたことはまた、ニールセンに対する分析の奥行を極めて深めることとなった。

演奏という行為が、あくまでも音楽家の哲学や精神に根ざしたものである以上、そこには楽曲に対する形式的、技法的な解釈を超えたレベルでのアプローチが要求されている。それはまさに「無秩序のなかの秩序」というニールセンの音楽の本質を実際の演奏により解き明かすことに他ならないのである。

ニールセンに関する研究活動は、入学以来5年間にわたるものであり、その間に2回、実際にデンマークを訪れての調査研究を行った。そのような活動は、私自身にとって、ニールセンの音楽の新しい魅力を次々に発見してくるという過程であったことは言うまでもない。更にまた、本論文、あるいは私の演奏により、ニールセンの音楽が、その本来の姿をもって人々に受け入れられていく契機を作り出すことを願っている。